

ヨハネの手紙第一2章12-14節 「子どもたち、父たち、若者たち」

1A 子どもたち - 罪の赦し 12

2A 父たち - 初めからの方 13a

3A 若者たち - 悪い者への勝利 13b

4A 幼子たち - 御父を知る 14a

5A 父たち - 初めからの方 14b

6A 若者たち - 御言葉を留まらせる強さ 14c

本文

ヨハネの手紙第一 2章を開いてください。今晚は、2章 12節から 14節までです。

¹² 子どもたち。私があなたがたに書いているのは、
イエスの名によって、
あなたがたの罪が赦されたからです。

¹³ 父たち。私があなたがたに書いているのは、
初めからおられる方を、
あなたがたが知るようになったからです。
若者たち。私があなたがたに書いているのは、
あなたがたが悪い者に打ち勝ったからです。

¹⁴ 幼子たち。私があなたがたに書いてきたのは、
あなたがたが
御父を知るようになったからです。

父たち。私があなたがたに書いてきたのは、
初めからおられる方を、
あなたがたが知るようになったからです。
若者たち。私があなたがたに書いてきたのは、
あなたがたが強い者であり、
あなたがたのうちに神のことばがとどまり、
悪い者に打ち勝ったからです。

ヨハネのこの第一の手紙には、これを読んでいる人々への深い愛情が込められています。最長老ともいえるべき歳を取っている人ですし、イエス様と共に3年ぐらい過ごして、主が復活してから60年、その信仰の歩みを果たしてきました。その中で、教会にいる人たちを、我が子のように愛していました。何度となく、彼は「愛する者たち」と彼らのことを呼んでいます。これまで、神を知って

いると言いながら、暗闇の中を歩んでいることの偽りについて話してきました。神の命令について、また兄弟を愛することについて話しました。そして今、彼らに親愛の思いを込めて、語りかけ、「あなたがたは神のうちにいるのだよ」と言って、安心させ、励ましているのです。

そして、ここの呼びかけの中で、気づくことがあります。大きく分けて、三つの呼びかけをヨハネはしています。「子どもたち」あるいは「幼子たち」、「若者たち」、そして「父たち」です。ここは、文字通りの年齢というよりも、他の箇所でも、同じ言葉でヨハネが呼びかけているところを見るに、霊的な成熟度、信仰による経験による呼びかけです。信仰を持ったばかり、その幼さがある人々のことを、愛情を込めて「子どもたち」あるいは「幼子たち」と呼びかけています。次に、霊的に成長していると感じる人々には、「若者たち」と呼んでいます。十分に成長し、成熟し、今や他の兄弟たちを指導し、神の家を治めている人々には、「父たち」と呼んでいるということでしょう。それぞれの霊的段階で、霊的な必要があります。その部分において、ヨハネは、彼らが恐れたり、不安に戻っていることがあるかもしれないと思って、これらのことばをもって励ましているのでしょう。

1A 子どもたち — 罪の赦し 12

¹² 子どもたち。私¹²があなたがたに書いているのは、イエスの名によって、あなたがたの罪が赦されたからです。

ヨハネは、「子どもたち」と呼びかけている時、イエスの名を信じる者たちが、神によって生まれたことを思っていることは確かです。福音書の中でもこう書きました。「1:11-12 しかし、この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとなる特権をお与えになった。この人々は、血によってではなく、肉の望むところでも人の意志によってでもなく、ただ、神によって生まれたのである。」第一の手紙の中でもこう言っています。「3:1 私たちが神の子どもと呼ばれるために、御父がどんなにすばらしい愛を与えてくださったかを、考えなさい。事実、私たちは神の子どもです。世が私たちが知らないのは、御父を知らないからです。」神によって生まれて、神の御霊によって生まれて、神に愛される子となりました。ヨハネは、事実、神の子どものなった彼らに、自分自身も愛情を注いで、「子どもたち」と呼んでいます。

そこで、そういった子どもたちに安心させたいこと、励まして確信を持ってほしいことがありました。それが、「イエスの名によって、あなたがたの罪が赦されたからです」であります。あなたがたの罪が赦されました。それはイエスがご自身の血を流して下さり、その罪を神が清めてくださったということです。このことを彼らに知ってほしい、何にもまして、何よりも初めに、イエスの名によって罪が赦されていることを知ってほしいと願いました。

というのは、信仰を持って間もなくの人たちは、これまで犯した罪の重さから、自分の罪が赦されたということの確信が用意に揺らいでしまうからです。キリスト者になったのだから、自分は善い行

いをしなければいけないのに、できていない。罪を犯してはいけないのに、また犯してしまった。もう赦されないのではないか？救われていないのではないか？と疑ってしまいます。そこに悪い者、サタンが付け込んで、罪責感を抱かせて責めるのです。

それでヨハネは、第一の手紙の中で既にこのことに取り組んでいました。「2:1-2 私の子どもたち。私がこれらのことを書き送るのは、あなたがたが罪を犯さないようになるためです。しかし、もしだれかが罪を犯したなら、私たちには、御父の前でとりなしてくださる方、義なるイエス・キリストがおられます。この方こそ、私たちの罪のための、いや、私たちの罪だけでなく、世全体の罪のための宥めのささげ物です。」罪を犯さないようにするために書いていますよ、けれども、犯したとしても、宥めのささげ物になってくださったイエスがおられます、ということです。

罪の赦しは、人間にとって非常に必要なものです。神の前に立てないという問題があるし、また、罪意識を背負って生きることの重さは過酷です。詩篇の著者はこう言いました、「25:11 【主】よあなたの御名のゆえに私の咎をお赦してください。それは大きいのです。」ですから、福音は、悔い改めによる罪の赦しの宣言によってもたらされます。イエス様は、中風の人に向かって、「子よ、あなたの罪は赦された。」と言われました(マルコ 2:5)。ペテロは、聖霊が降ってから初めての説教で、罪示されたユダヤ人たちに、こう言いました。「使 2:38 そこで、ペテロは彼らに言った。「それぞれ罪を赦していただくために、悔い改めて、イエス・キリストの名によってバプテスマを受けなさい。そうすれば、賜物として聖霊を受けます。」

罪の赦しによって、良心が清められます。魂に癒しが与えられます。時に、魂だけでなく肉体の癒しも経験することでしょう。ヘブル書では、「血を流すことがなければ、罪の赦しはない」とあります(9:22)。私は、幼い時に新たな年を迎えるにあたって、部屋の大掃除をして、大晦日にはお風呂も、いつもに増してきちんと体を洗いました。そしてさっぱりした気持ちで年を迎えます。けれども、お風呂の水では決して洗い清められない、良心の咎めがあります。それは、神に罪を犯しているという罪から来るもので、血によってしか清められないのです。そこで、ヘブル書の著書はこう言います、「ヘブル 9:14 まして、キリストが傷のないご自分を、とこしえの御霊によって神にお献げになったその血は、どれだけ私たちの良心をきよめて死んだ行いから離れさせ、生ける神に仕える者にすることでしょうか。」傷のないご自分の血をキリストが流されたことによって、私たちの良心が清められて、それで生ける神に仕えることができるようにされています。この第一の手紙にも、「1:7 もしあなたが、神が光の中におられるように、光の中を歩んでいるなら、互いに交わりを持ち、御子イエスの血がすべての罪から私たちをきよめてくださいます。」とありました。

そこで、パウロはヨハネと同じように、励ましました。ローマ 8 章 1 節に、「こういうわけで、今や、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません。」と断言しているのです、なぜなら、3 節にこうあります、「8:3 肉によって弱くなったため、律法にできなくなったことを、神はして

くださいました。神はご自分の御子を、罪深い肉と同じような形で、罪のきよめのために遣わし、肉において罪を処罰されたのです。」ですから、どんなに悪魔が自分を責め立てても、イエスの名によって罪が赦されたと知ることだ、ということです。偽教師は、新しい信者たちを自分たちの方に引き寄せるために、弱い良心を使って、行いによって救われるかのように責め立てるのです。だからヨハネは、初めに信じた者たちは、罪が赦されたということを思っていなさいと勧めています。

2A 父たち — 初めからの方 13a

^{13a} 父たち。私があなたがたに書いているのは、初めからおられる方を、あなたがたが知るようになったからです。

「父たち」という呼びかけです。パウロは、テモテに対して、「信仰による、真のわが子テモテへ。」と呼んでいます（Ⅰテモ 1:2）。自分が信仰による父だと思っているのです。コリントの人たちに対しても、「Ⅰコリ 4:15 たとえあなたがたにキリストにある養育係が一万人いても、父親が大勢いるわけではありません。この私が、福音により、キリスト・イエスにあつて、あなたがたを生んだのです。」と言いました。彼らに対して、やはり自分自身が父だとみなしたのです。つまり、自分自身は十分に成長し、成熟しており、人を信仰的に養い育てるような働きをしている人々のことを言っています。

そういう人たちが必要な言葉が、「初めからおられる方を、あなたがたが知るようになった」ということです。初めからおられる方とは、手紙の冒頭にある言葉、「1:1 初めからあつたもの、私たちが聞いたもの、自分の目で見たもの、じっと見つめ、自分の手でさわつたもの、すなわち、いのちのことばについて。」であります。もっと詳細に言うならば、福音書の冒頭の言葉があります。「1:1 初めにことばがあつた。ことばは神とともにあつた。ことばは神であつた。」初めからおられた父なる神と、御子キリストのことです。

父というのは、元にあるという意味合いがあるでしょう。「エペ 3:15 天と地にあるすべての家族の、「家族」という呼び名の元である御父の前に祈ります。」父は家を養い、家を守り、家を導きます。家においては、すべての前にいて、初めにいなければいけません。世の中で、しばしば「父の不在」という言葉がありますが、それは家のことについて、父が初めにいないことが問題なのです。家で起こっていることについて反応して、対応しようとしていますが、その時点で父としては失格です。家で起こっていることの始まりに自分がいなければならないのに、その責任を果たしていないからです。

ですから、人々の信仰を養い育て、守り、家を治めていく時に、父たちが最も必要としているのは、自分自身の父です。その父が、初めからおられた方、つまり神であられ、そして御子キリストが、父なる神を完全に表してくださったということです。父にとって必要なのは、神の御前に自分自

身が出て行って、自分の必要、自分の知恵、自分の力、自分の決断、すべてを神によって満たしていただくことです。神の前に行って、涙して、砕かれる勇気をもった男が、真の男であり、父になることができます。

3A 若者たち — 悪い者への勝利 13b

^{13b} 若者たち。私があなたがたに書いているのは、あなたがたが悪い者に打ち勝ったからです。

ヨハネがここで、「若者たち」と言っているのは、若者にある強さを意識してのことです。または、成長しているということを指しているでしょう。若者には若者の弱さがあり、その葛藤の中で生きていて、打ち勝つこと、克服することが課題となっています。霊的には、罪との戦いです。ヨハネは第一の手紙で、この罪との戦いに多くを書いています。神を知っていると言いながら闇の中を歩んでいたら偽りであるということ。神を知っていると言いながら、その命令を守っていない人は偽り者であるということ。次回、「世を愛しているなら、その人のうちに御父の愛はありません。」とあります(15節)。3章6節には、はっきりと、「3:6 キリストにとどまる者はだれも、罪を犯しません。罪を犯す者はだれも、キリストを見たこともなく、知ってもいません。」と言っています。罪を犯さなくなる、罪に勝利することが、成長していることの特徴です。

けれども、どうしても罪を犯してしまう。どうしてか？自分は悪魔に敗北しているのか？そう思ってしまう自分がいます。しかし、ヨハネは励ましているのです。「あなたがたが悪い者に打ち勝ったからです。」罪の中にいた時は、悪魔の言いなりになっていたけれども、キリストによって贖われた今、悪い者に打ち勝っているのだということです。第一の手紙でこれから、ヨハネは悪い者があなたがたを支配することはない、勝利していることを何度となく語っていきます。「4:4 子どもたち。あなたがたは神から出た者であり、彼らに勝ちました。あなたがたのうちにおられる方は、この世にいる者よりも偉大だからです。」「5:4-5 神から生まれた者はみな、世に勝つからです。私たちの信仰、これこそ、世に打ち勝った勝利です。世に勝つ者とはだれでしょう。イエスを神の御子と信じる者ではありませんか。」そして5章18節で、こう言っています。「神から生まれた者はみな罪を犯さないこと、神から生まれた方がその人を守っておられ、悪い者はその人に触れることができないことを、私たちは知っています。」

悪魔は、エデンの園のところから働いていました。エバに惑わしを与えました。「創世 3:4-6 すると、蛇は女に言った。「あなたがたは決して死にません。それを食べるそのとき、目が開かれて、あなたがたが神のようになって善悪を知る者となることを、神は知っているのです。」そこで、女が見ると、その木は食べるのに良さそうで、目に慕わしく、またその木は賢くしてくれそうで好ましかった。それで、女はその実を取って食べ、ともにいた夫にも与えたので、夫も食べた。」このようにして、世が悪魔の支配下に入りました。イエスが来られたというのは、その逆算です。エバは、肉の欲に屈しました。「その木は食べるのに良さそう」と言っています。そして、目の欲に屈しました。「目

に慕わしく」とあります。そして高慢の罪に屈しました。「その木は賢くしてくれそうで好ましかった」とあります。

この逆算をイエス様は、荒野の誘惑において行われました。つまり、肉の欲に悪魔はおびき寄せようしました。「マタ 4:3 あなたが神の子なら、これらの石がパンになるように命じなさい。」神の子としての力を、自分の腹を満たすために使うように誘ったのです。主は拒みました。次に、目の欲に訴えました。「4:5-6 すると悪魔はイエスを聖なる都に連れて行き、神殿の屋根の端に立たせて、こう言った。「あなたが神の子なら、下に身を投げなさい。『神はあなたのために御使いたちに命じられる。彼らはその両手にあなたをのせ、あなたの足が石に打ち当たらないようにする』と書いてあるから。」」目に見える形で神の御子であることを示せば、どうか？という訴えです。これも拒まれました。そして、「4:8-9 悪魔はまた、イエスを非常に高い山に連れて行き、この世のすべての王国とその栄華を見せて、こう言った。「もしひれ伏して私を拝むなら、これをすべてあなたにあげよう。」」といって、自分に栄華が行くように誘ったのです。これも拒まれました。主は、私たちと全く同じ肉体を持っておられたのですから、肉の弱さは主にとっても現実でした。それであっても、父なる神に従順であったので、悪魔を拒まれたので、打ち勝たれたのです。

この主が、私たちの罪を取り除くために死なれ、三日目によみがえらえたのですから、悪魔には敗北と滅びが定められたのです。「コロ 2:13-15 背きのうちにあり、また肉の割礼がなく、死んだ者であったあなたがたを、神はキリストとともに生かしてくださいました。私たちのすべての背きを赦し、私たちに不利な、様々な規定で私たちを責め立てている債務証書を無効にし、それを十字架に釘付けにして取り除いてくださいました。そして、様々な支配と権威の武装を解除し、それらをキリストの凱旋の行列に捕虜として加えて、さらしものにされました。」

そこで、ヨハネは黙示録において、数多く「勝利する者」という主のことばを書き記して、信仰者が世に打ち勝っていることの確証を与えました。「2:7 耳のある者は、御霊が諸教会に告げることを聞きなさい。勝利を得る者には、わたしはいのちの木から食べることを許す。それは神のパラダイスにある。』」「2:11 耳のある者は、御霊が諸教会に告げることを聞きなさい。勝利を得る者は、決して第二の死によって害を受けることはない。』」「2:17 耳のある者は、御霊が諸教会に告げることを聞きなさい。勝利を得る者には、わたしは隠されているマナを与える。また、白い石を与える。その石には、それを受ける者のほかほだれも知らない、新しい名が記されている。』」「2:26 勝利を得る者、最後までわたしのわざを守る者には、諸国の民を支配する権威を与える。」「3:5 勝利を得る者は、このように白い衣を着せられる。またわたしは、その者の名をいのちの書から決して消しはしない。わたしはその名を、わたしの父の御前と御使いたちの前で言い表す。」「3:12 わたしは、勝利を得る者を、わたしの神の神殿の柱とする。彼はもはや決して外に出て行くことはない。わたしは彼の上に、わたしの神の御名と、わたしの神の都、すなわち、わたしの神のもとを出て天から下って来る新しいエルサレムの名と、わたしの新しい名とを書き記す。」「3:21 勝利を得る者

を、わたしとともにわたしの座に着かせる。それは、わたしが勝利を得て、わたしの父とともに父の御座に着いたのと同じである。」これらは、七つの教会に対するイエス様の言葉です。すべてに、勝利者への約束があります。

4A 幼子たち — 御父を知る 14a

次の節は繰り返しますが、少しずつ違ってきます。

^{14a} 幼子たち。私があなたがたに書いてきたのは、あなたがたが御父を知るようになったからです。

先ほどは、「子どもたち」でしたが、こちらは「幼子たち」です。子どもは、そのまま子どもの意味合いです。幼子は、未熟さがその意味合いの中に出てきます。イエスの御名による罪の赦しを得た今は、「御父を知るようになった」というのです。自分がどんなに幼いと感じても、知識においては圧倒的に少ないと感じていても、決してそんなことはない、子は親を知っています。父を知っています。「ロマ8:15 あなたがたは、人を再び恐怖に陥れる、奴隷の霊を受けたのではなく、子とする御霊を受けたのです。この御霊によって、私たちは「アバ、父」と叫びます。」

18節から、ヨハネは反キリストが来ること、偽預言者が来ることを警告しますが、そこで呼びかけが、「幼子たち」となっています。けれども、「2:20 聖なる方からの注ぎの油があるので、みな真理を知っています。」と言っています。幼子が、最も偽教師に惑わされやすいです。けれども、あなたがたは御父を知っている、だから真理をすでに知っているのだということです。

5A 父たち — 初めからの方 14b

^{14b} 父たち。私があなたがたに書いてきたのは、初めからおられる方を、あなたがたが知るようになったからです。

ヨハネは再び同じことを繰り返しています。

ただ、微妙に違います。12-13節と、14節の違いは、前者が、「書いているのは」と言っているのに対して、後者が「書いてきたのは」となっていることです。おそらくですが、一回目で呼びかけている時は、ヨハネは手紙全体のことを考えながら、「書いている」と言っていたのでしょう。二回目、ここ14節では、これまで1章1節からここまで「書いてきた」と言っているのではないかと思います。何度となく同じことを書いて、ヨハネは私たちがただ知性的に知るのではなく、確かに霊的に知っていることを確認してほしいと願っているのだと思います。

6A 若者たち — 御言葉を留まらせる強さ 14c

^{14c} 若者たち。私があなたがたに書いてきたのは、あなたがたが強い者であり、あなたがたのうち

に神のことばがとどまり、悪い者に打ち勝ったからです。

若者に対して、再び励ましています。ここでは、まず、「あなたがたが強い者である」と言っています。悪い者にいつも敗北する弱いものではなく、勝利している強い者なのだということです。

そして、どのようにして打ち勝っているのか、その秘訣をヨハネはここで書いています。「あなたがたのうち神のことばがとどまり」ということです。ヨハネは、「2:5 だれでも神のことばを守っているなら、その人の中には神の愛が確かに全うされているのです。」と書いていました。神の言葉に留まっていることが、悪い者に打ち勝つようにさせます。詩篇の著者は言いました、「119:11 私はあなたのみことばを心に蓄えます。あなたの前に罪ある者とならないために。」御言葉にこそ、罪から引き離す力があります。先に、イエス様が悪魔の誘惑に打ち勝たれたところを話しましたが、主はすべて御言葉によって対抗されました。「マタ 4:4 イエスは答えられた。『人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つのことばで生きる』と書いてある。」「4:7 イエスは言われた。『あなたの神である主を試みてはならない』とも書いてある。」「4:10 そこでイエスは言われた。「下がれ、サタン。『あなたの神である主を礼拝しなさい。主にのみ仕えなさい』と書いてある。」「すべて御言葉によってであります。みことばは、エペソ 6 章の霊の戦いの武器では、「6:17 御霊の剣、すなわち神のことばを取りなさい。」とあります。私たちが御言葉を豊かに住まわせて、しっかりと地道に、生活の中で適用させる、実践することによって勝利ある生活を期待できます。

みなさんは、今、どこの段階にいるでしょうか？実は、段階というよりも側面と言ってもいいでしょう。罪の赦しは、いつも私たちは思い出します。いつになってもそうです。御父を知っていることもそうでしょう。そして罪に打ち勝つことも、いつになっても必要です。確信を持ちましょう、そして安心してください。